

# 歴史余話

# とくべつ

第5回から  
『新当別町史』編さん  
にかかわる方々による  
リレー連載  
開始

一般に、自治体史の編さんが2度目以降となる場合には、前回で扱った年代から後の時代を編さんの対象とする場合と、先史時代から現代までの歴史を改めて編さんし直す場合との何れかに分かれる。

当別町の場合、これまで少なくとも3度の自治体史編さんを行っている。すなわち、戦前の『当別村史』(昭和13年3月)を筆頭に、戦後では『100年のあゆみ 当別小史』(昭和45年9月)、そして『当別町史』(昭和47年5月)である。村史は明治4年(1871)、仙台藩岩出山領主・伊達邦直の当別移住50年を記念したもの(発行は昭和13年)、小史と前町史は、同100年記念史である。さらに、当別移住70年、同80年、同90年の際にも、それぞれ記念誌が刊行されている(『当別町史』発刊のことば)。

さて、前町史の刊行以来すでに約半世紀の時が流れている。この間における北海道史研究の発展は目覚ましいものがあり、本来ならば新町史の編さんにおいても、先史・考古時代から現代までの当別町(地方)の歴史を全面的に見

## 第5回『新当別町史』の編さんについて

監修者 桑原 真人

直すべき時期であるが、それには、当然のことながら相応の物理的時間と経費を必要とする。

したがって、当別町史編さん委員会が、『新当別町史』の編さんにあたり、その起点を「100年史以降の101年目から150年までの50年間を中心に編さん作業を進め」ること、すなわち前町史の叙述が終了した昭和45年以降の50年間を新町史の対象として設定したことは適切な判断である。

次に、北海道における自治体史編さんの動機として、「開基」意識が契機となることが多い。北海道の歴史には、先住のアイヌ民族と後から移住した和人との対立・交流の歴史という側面があるが、このような意識は「和人ファースト」的な歴史観である。ここから、近代の和人移民による開拓を北海道の歴史発展の成果として積極的に評価する見方が生まれてきた(開拓史観とか拓殖史観と呼ばれる)。

『新当別町史』の編さんに当たっても、このような「開基」を巡る課題を意識しながら事業を進めてゆきたい。「開基」以前にも歴史は存在するのだから。

